



## 境界からの発信

2月×日

今日は久しぶりにレポーターだ。最近延々としゃべることばかりで、20分とかいう限定された時間でしゃべることがほとんどない。でも、それだけになにをしゃべるかきちんと考えていないとダメなんだよね。それにしても、なんでわたしがレポートする分科会が「女性の生き方」なんだ?

\*\*\*

この日、わたしが参加した集まりは、「母と女性教職員の会（母女）」でした。母女は、1954年の日教組第3回全国婦人教員研究協議会で採択されたアピール「日本のお母さんに訴える」をきっかけにはじまり、現在も年1回の全国大会をはじめ、それぞれの地域や各都道府県単位の集まりが続いている（注）。「日本のお母さんに訴える」の内容は「日本の子どもを守りましょう」「お母さんの体を守りましょう」「憲法を変えないようにしましょう」の3つでした。敗戦から約10年がたち、いつの間にか防衛庁が設置され自衛隊が発足したというこの年に、このアピールが、しかも「女性」という共通項において採択されたことは、画期的でありながらも、必然でもあったと思います。

ところで、わたしは子どもの頃からずっと「女性のコミュニティに入りたい」という思いをもっていました。しかし、当時「男性」として生きていたわたしが、「女性のコミュニティ」に入ることは、ほとんど不可能でした。やがて、トランスジェンダーとして生きることができるようになってから、その思いはより強く、具体的になりました。例えばそれは、組合においては、「女性部に入りたい」ということでした。しかし、女性部が、労働者としての女性の権利擁護をする一方で、女性という当事者性からわかる教育課題へのとりくみを進めてきた存在であることはわかっていました。女性としての歴史の欠落を自覚しているわたしは、その女性部に「入りたい」というひとことを、どうしても言うことができませんでした。

そんなわたしに、3年ほど前、突然「女性部に入らへん?」と声がかかりました。正直迷いました。はたして自分に女性部に入る資格があるのだろうか。あるいは入ったとしても、女性部のために自分に何ができるだろうか。でも、誘ってくれた人は「来られるときに来てくれたらええよ。それだけでも元気が出るし」と言ってくれました。その言葉に背中を押してもらって、女性部に入れてもらうことにしました。年に数回、携帯に「女性部のお知らせ」のメールが入ってきます。そのメールを受け取るたび、自分が受け入れられている気持ちがして、なんとなく心がホンワカします。

そんなわたしに、今回、母女の「女性の生き方」分科会のレポーターの話が来ました。どんな話がわたしにできるのか、女性部長の〇さんとビールを飲みながら話しました。女性部への自分の思いを語り、わたしを受け入れてくれた〇さんの思いを聞くうちに、話してみたいことがわかつきました。それは、「女性ってなに?」ということでした。女性が女性として生きるなかで、かえって「女性ってなに?」ということをわからなくさせられているかもしれない。そのことを、境界に生きるわたしが自分の考えを語ることで、なにかおもしろいことが起こらないかと思ったのです。

当日は、賛否両論のなかにも、わたしをもっと知りたいという暖かい質問がたくさん出ました。母女の場に受け入れられていることを感じました。

トランスジェンダーとして生きてきたことが、簡単な道だったとは言えません。でも、そのなかでたくさんの支えがあり、出会いがありました。今、わたしには全国に何百人という仲間がいます。そんな仲間たちに囲まれて、今、わたしは幸せです。

で、今号で連載が終わると思っていたら、「いつきさんのことがわからないから、もう少し連載をのばす」と言われてしまいました。ということで、来月から新たなかたちで皆さんとお会いできるみたいです。＼(^o^)／

（高校教員 土肥いつき）

（注）参加者に保護者も含むため、日教組と連携をとりながらも、別の組織として運営されています。